

# 短期派遣 EUROPA 派遣報告書

平成 23 年 10 月 2 日

所属機関 東京外国語大学  
職・氏名 リサーチ・フェロー 白村 直也

研究課題：ソヴィエトにおけるろうあ者の社会史  
用務地：モスクワ（ロシア）  
用務先：ロシア国立図書館他  
出張日程：平成 23 年 9 月 1 日～ 平成 23 年 10 月 1 日

## ○研究の概要

申請者は博士論文にて、帝政ロシア末期からソヴィエト期の 1938 年までを時間幅にとり、手話をめぐって当事者社会団体(全ロシアろうあ者協会、以下、協会)の間でなされた議論を機関誌「ろうあ者のくらし」を精読することで追い、その歴史的な文脈の把握を行った。博士論文提出後は時間幅を下って設定し、引き続き考察を進めていくことを考えている。こうした考察は、次の 2 点から位置づけを得ると同時に、今後の発展が期待される。つまり、1)「障害者」を対象とすることから、「社会福祉国家」としてのソ連の歴史を振り返り再考・検討する、2)ソヴィエト・ロシア地域研究においては伝統的に、諸民族の言語政策研究が一つの大きな中心を担ってきており、それは研究者の注目を現在でも集め続けている。申請者の研究は、そうした従来の自然言語の政策研究に、非自然言語である手話をめぐる政策動向を付き合わせようというものである。そうすることによって、ソヴィエト・ロシアの「多言語・多文化」をめぐる状況の、構造的な把握に寄与する。

博士論文以降の後続する時期とは、独ソ戦からペレストロイカまでを念頭においており、この間の協会の活動と、手話をめぐる議論展開について考察していく。この作業を踏まえて、博士論文にて展開した議論を振り返る手続きも行う。この考察を行う上で、協会の機関誌「ろうあ者のくらし」を現地ロシアの国立図書館にて入手するというのは、同時代的に当事者の間でなされた議論の考察を行う上で不可欠な作業であり、ITP応募を希望した理由はこの点にあった。

従来のソヴィエト史研究には、「障害者」と銘打って取り組まれた形跡は見当たらないが、革命からペレストロイカに至るまでの相当の社会的状況(社会保障制度史、教育制度史、そして言語政策史など)を浮かび上がらせつつある。そうした成果を申請者は、もちろん積極的に取り入れる。その上で、「ろうあ者のくらし」という一次資料読み込むことで協会の活動をなぞらせ、戦前までの議論がどのように変遷していったのかを考察することを念頭に海外派遣に臨んだ。

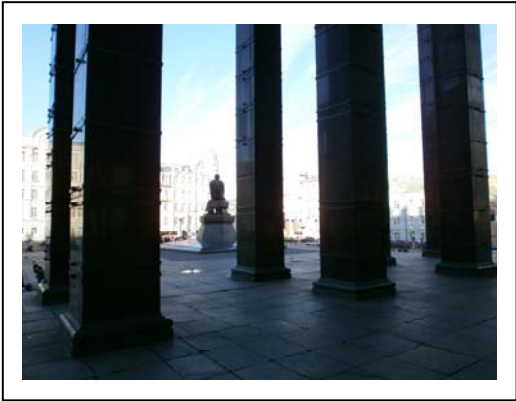
また、2 つ目の派遣理由として博士論文執筆中に連絡を取り合っていた全ロシアろうあ者協会へ派遣期間中に赴き、ロシアにおける歴史研究の現状や成果を聞き取り調査することを挙げた。協会機関誌の現編集委員である V. パレンヌー氏には博士論文執筆中に史料の提供を受け、その後も複数回コンタクトを持った。滞在期間中、時間が許すなら彼を通じて協会にアプローチし、ロシアにおける歴史研究の現状や成果を聞き取り調査することを考えているとして ITP に申請し採択され、ロシアにて現地調査を行った次第である。

## ○研究成果

IITP申請時には、当面の研究日程について次のように記した。それは、①2011 年度スラヴ人文学会(日程は現段階ではゴールデンウィーク後)での博士論文の成果の発表と批判を仰ぐ。②2011 年 6 月末から 7 月頭に予定される博士論文公開審査での審査結果を受けての反省点と今後の方向性の確認。③2011 年 8 月半ばから 9 月にかけて、東京外大IITP制度を利用してのロシアへの渡航、ロシア古文書館での一次資料の収集と帰国後の資料の読み込み。④一次資料の読み込みを通じて得られた成果を、指導教官の許可を得た上で 2011 年度末に『スラヴ文化研究』へ投稿、もしくは 2012 年度スラヴ・東欧学会の英文機関誌『Japanese Slavic and East European studies』へ投稿する、というものだった。

①の学会発表については、開催日時が公開審査直前に組まれたため、残念ながら実現することができなかったが、②については、様々な先生から助言を受けることができ、それは非常にありがたいことであった。そして④については 2011 年度末に『スラヴ文化研究』への投稿・掲載を行い、スラヴ・東欧学会誌にも掲載されたことを成果として記しておきたい。

こうした成果の一つ一つは 2011 年 9 月のIITP海外派遣という機会がなければ為しえなかったことだ。そこで、③の成果について具体的に記しておきたいと思う。



9 月 1 日から帰国前日までの日々は一日の流れとして、朝 9 時から夕方 6 時までレーニン図書館や歴史図書館で資料収集に没頭していた。気になる資料や、今後必要になるであろう資料をその都度コピーし、宿泊先に持ち帰り、再度読み直してみる、という作業を繰り返した。指導教官がしたためて下さった紹介状を手に、いくつかの図書館や資料館に入館することができたのは、史料収集の幅を広げる上で大いに役に立った。ここで指導教官・高橋先生に感謝を申し上げたい。

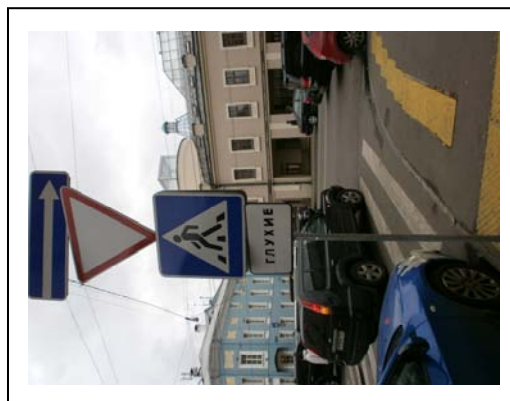
(レーニン図書館入り口前、報告者撮影)

入手した資料は、主に独ソ戦後の当事者社会団体の機関紙からのものが多い。戦時中は雑誌の発行が抑制されていたこともあり、協会機関誌に限らず、諸雑誌紙面の文脈が途切れ途切れになることは十分にありうることである。したがって、主に戦後の資料を入念に検討することで、当事者の立場から「戦争経験」を振り返る糸口としたい、と考えた。

史料収集が一段落した帰国間際に、当事者社会団体(全ロシアろう者協会本部とそのモスクワ支部)の事務所を訪れることにした。事前にメールのやり取りしアポをとってから訪れたかったが、そのやり取りが遅々として進まなかったこともあり、結局は 9 月 25 日の突然の訪問となってしまった。



(モスクワ支部入口看板、報告者撮影)



(支部前の交差点、ろう者が通行するためか、「ろう者」と黒字表記されている。報告者撮影)



(支部内部、左手前には指文字アルファベットを模った模型、報告者撮影)

だが、突然の訪問にも関わらず、支部の職員の方々には丁寧な対応をして頂いた。現在のろう者が置かれた状況や問題点を意見交換することができたのは、非常に有益なことであった。支部が保有する史料を譲り受けることができたことも有難いハプニングであった。

次に協会本部を同日訪問した。先に、協会の機関誌編集委員である V. パレンヌイ氏には博士論文執筆中に史料の提供を受け、その後も複数回コンタクトを持ったことを記したが、ようやくここで初めてお会いすることができた。



(全ロシアろう者協会本部入口看板、報告者撮影)



(報告者と V. パレンヌイ氏)

氏との会話は非常に印象深いものであった。支部で聞いた、現在のロシアにおいてろう者がどのような状況に置かれており、彼らが抱える問題とその展望から一步踏み込んだ、より具体的なお話をお伺いすることができた。また、近々発刊となる関連書籍についての情報とすでに発刊されている膨大な量の関連書物を頂いた。

#### ○今後の課題

さて、モスクワでの現地調査を終えた今、報告者が取り組まなければならないことは非常に多い。まずは持ち帰った史料の読み込みは丁寧にかつ、迅速に行うべき課題である。研究成果として、『スラヴ文化研究』へ投稿と掲載、そして同様にスラヴ・東欧学会の英文機関誌『Japanese Slavic and East European studies』への投稿・掲載を挙げたが、持ち帰った史料は、その中で必ずしも消化できたわけではない。今回お世話になった方々に感謝の意味を込める意味でも、それらを今後どのように活かして、社会に還元していくかは切実に考えていかなければならない。

また、協会や支部とのコンタクトは今後も継続してとり続けていきたい。現地の情報をタイムリーに受け止め、彼らの動静を注視していき、今の日本がロシアの「経験」から学ぶべきものは何か、を真摯に考えていきたい。